

ラルフ・タウンゼントが説く――

田中秀雄
近現代史研究家

底知れぬ怖さ

「ひるなく怖い」——これがすべての中国人に持つ第一印象

支那の苦力の恐ろしさ

二十数年前のことだが、映画監督の山田洋次氏が満洲大連時代の思い出を書いていたものを読んだことがある。満鉄に勤める叔父さんと馬車に乗っていたら、叔父さんが馬車引

きの中国人の顔をいきなり平手打ちした。それを見た少年の自分はとても心が傷ついたというのである。満洲という植民地を暴力で支配した日本人の傲慢さがそこに出ていると。

私はこれを読んだとき、叔父さんが殴った理由は何なのか、山田氏はそれを考察すべきではないかと思つ

たが、私には反論材料がなかった。

その後、ラルフ・タウンゼントが九三三年に出版した「Ways that are dark」(芙蓉書房出版。以下、本書)として翻訳出版することによつて、私は山田氏への反論ができるようになつた(翻訳出版は一〇〇四年のこと)だが、解説を刷新した新装版の計画は昨年十二月、発刊が今年三月の半ば過ぎ、中国発のコロナウイルスが

いる。三一年と言えば、満洲事変が起きた年であり、翌年一月に起きた第一次上海事変にも遭遇している。

そして、三二年四月には、福建省福州の領事に異動。翌年、中国勤務を終わつて帰国した後、本書を執筆した。

馬車引きや人力車引きは、苦力と呼ばれる下層労働者たちの就いていふ仕事である。ボロを着て見るからに哀れなもので、不憫に思い、つい運賃をはずむと「騙された!」と叫んで、「もつとくれ」と、さらに恐ろしい迫力で大声を上げる。不憫と思うことは、弱みを見せることなのだ。

タウンゼントは言つう。『(中国人は)「金がすべて」であり、もうこそ宗教に近いものがある。もく話になるとどんな苦労でも厭わ

ない。また、友人や家族の誰かが死んでも顔色一つ変えない人が、金を失くしたとなると大騒ぎである』

満鉄に勤める叔父さんは運賃の相場を知つてゐるはずである。運賃をはずんだ上に、もつとくれ、と言われて「無礼者」とばかりに張り飛ばしたことくらい山田氏は想像できないのだろうか。苦力たちの側にも大きな問題があることに思い至らないのか。私はこういうところに、山田氏の偽善性を感じるのである。

社会の下層労働者たちはすべて善意で、権力者によって打ちひしがれていの存在であるという、ある種、社会学的に歪んだ思い込みである。

機を見るに敏な中国人

このような中国人に対する善意の



タウンゼントは言つう。
『(中国人は)「金がすべて」であり、もうこそ宗教に近いものがある。もく話になるとどんな苦労でも厭わ